

二拠点居住を経てUターン、そして起業。 地域を盛り上げる情報発信市場。

普段、移住相談を対応しているなかで最も多いのが仕事に関する内容である。多くの方が移住後の生業に不安を持っている。しかし一昔前と比べると、農業、飲食店・ゲストハウスなどのお店開業、地域おこし協力隊制度の活用、また最近では、遠隔で仕事をこなすリモートワークや複数の拠点を歩き来して仕事をする多拠点居住など、

様々な働き方ができスタイルも多様化してきている。都心から電車で片道2時間以上かかる奥武蔵と呼ばれる地域、埼玉

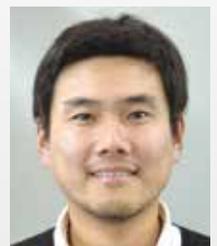


県越生町に移住した浅見さんご家族は東京での暮らしと並行する二拠点居住を経て、現在「オクムサ・マルシェ」という飲食店を営んでいる。この地にどのようなプロセスで定住したのか、その経緯を紹介していきたい。

**忙しい日々を送りながら作った
「未来の企画書」**

埼玉県越生町出身であるご主人の敦さんは、15年程東京でデザインの仕事に従事していたが実家のある越生町には年末年始に帰る程度。20代の頃は仕事に没頭し忙しい生活を送り、当時は特に東京を離れてUターンする気持ちはあまりなかった。

その後洋子さんとの出会い、結婚。そのまま東京での生活が続いていたが、敦さんの実家に里帰りする度に洋子さんは越生の町に惹かれていったという。東京生まれの彼女にとって、越生町はとても新鮮で居心地の良い場所だと感じたのだ。そして観光だけにとどまらず、越生町の若手の農家が主催するファーマーズマー



えひめ移住
コンシェルジュ
板垣 義男

ケットなどにも遊びに行くようになった。そこで目にしたのは、自分たちと同世代の人たちが生き生きと里山暮らしを楽しんでいる光景だった。彼らを見て、カッコいい、そして何より豊かで羨ましいと感じるようになった。このように洋子さんの思いをきっかけに「移住」という選択肢を意識するようになったのである。

その後、彼らは東京に戻ってからも自分たちで越生町に暮らすなら何ができるか？を考えた。そうになった。

「実家にあるガレージをリノベーションしてカフェを作ったらどうだろう」
「越生町は梅林や滝などの観光的要素が多いから気軽に





立ち寄れるような地域の魅力が集まったお店があったらいいよね」「越生町の土産物は梅とゆず。薬膳料理と相性がいいんじゃない?」「そんな店があれば、まちなも盛り上がるんじゃないか」このようにして自分たちだけの「未来の企画書」を作り始めた。

妄想から現実へ。 DIYワークショップでの改修作業

二人で未来の暮らしを思い描いていたその頃、ある建築士に出会う。彼は自宅の倉庫をリノベーションした経験があるという。そこで話が盛り上がり意気投合する。そして彼に様々な相談をしていくうちに、妄想をつなぎ合わせたプランが徐々に現実的な形となっていく。さらに彼は低コストでの店舗改修方法としてDIYのワークショップ形式で行うことを提案し、すぐに実行することになった。敦さんは早速、SNSを利用して友人たちに声かけをし、ボランティアで改修



作業に参加してくれる方を集めた。昔ながらの友人たちは地元で新しいことが起こりそうだという興味と、自分たちも地域に貢献したいという思いで作業に積極的に参加してくれた。また、改修現場をSNSで日々発信し続けたこともあり、違うコミュニティでの知り合いやSNS投稿を見た「初めまして」の方までもが加わるようになった。このようにみんなが集える場を作ろうという熱い思いを感じて、約4ヶ月の間、毎週末3〜5人のメンバーが集まった。こうして平日を東京で過ごしながら週末は越生町でリノベーション作業という日々が続ぎ、2014年7月、週末のみの営業で「オクムサ・マルシェ」はオープンの日を迎えることとなる。

まちの情報発信源としての役割

平日は東京で会社勤務、土日は越生町でカフェ運営という二拠点生活がいよいよスタートした。地元のみならず越生町に訪れる観光客からも徐々に認知されるようになり、少しずつお客さんも増えていった。その後、越生町で観光客の最も多く訪れる2〜3月の梅のシーズンやゴールデンウィークの頃には、途切れることなくお客様が来店されるようになった。また、地元のイベントにも出店するようになり、当時憧れていた方達とつながりを持つようになっていった。お店が

軌道に乗る自信もついてくるようになった。それが、それと同時に体力的にも精神的にも二拠点での暮らしに疲弊感も感じていた。そして、敦さんは東京の会社を退職し埼玉県越生町に定住することを決意し、お店の経営に専念することとなった。今では地元新聞や行政、観光雑誌や地方創生・移住関連媒体など様々なメディアに取り上げられるようになり、「オクムサ・マルシェ」は越生町ではなくてはならない存在となった。店内にはギャラリースペースを設けて地元の作家による作品の展示・販売を行っている。このスペースには彼らが良いと思った作品だけを置くというこだわりも。このように、憧れや妄想で生まれた二人の「未来の企画書」は、「オクムサ・マルシェ」というまちの情報発信源としてカタチとなった。これからも地元を盛り上げる大切な場所として、地域活性化に貢献していくだろう。

